第1626回（11月22日）

秩父観光産業の再編成
― 農業の観光資源化を含めて ―

（早稲田大学社会科学研究所特別研究員）
叶　堂　隆　三

近年，グリーン・ツーリズムなど農業の観光資源化の可能性が論議されている。しかし，こうした農業の展開は，本当に，バラ色の未来を約束するものなのであろうか。本報告は，早稲田大学地域社会研究会による，「広域社会圏の統合と変動に関する実証的研究」（1984年～1986年）の一環として行なった調査の結果を用いて，埼玉県秩父地域における観光農園の出現・展開を，地域における観光産業全体の再編成・展開の中に位置づけることをとおして，農業の「観光資源化」の現れた状況を示すと同時に，そこに現れたさまざまな問題点を明らかにすることを目的とした。

本報告では，入り込み観光客数の変化等により，秩父観光産業の展開を①西武鉄道開通以前（1968年まで），②西武鉄道開通以降～昭和50年代半ば（1980年）までに，時期区分した上で，それぞれの時期について，観光資源・所有者・活動者・観光形態といった具体的項目について，その特徴を明らかにしている。

こうした時期区分において，西武鉄道秩父線開通の直前に誕生した観光農園の展開は，西武鉄道の開通に伴う地域の諸資源を用いた新たな展開として位置づけられよう。この時期の観光産業の特徴は，西武鉄道開通以前と比較して，編成が観光業者中心であること，資源を積極的に活用あるいは組織化している，また，観光業者の所有する資源が，観光資源として加わってきていることが特徴としてあげられる。

すなわち，観光農園は，（都市住民の自然志向を取り込んだ）農業の観光産業化という方向であり，観光資源として，従来は観光資源として用いられることのなかった地域資源の観光資源化というかたちをとり，また，自らもその資源の一次的活用者という形態とみることができる。

秩父地域の観光農園には，ぶとう園，きのこ園，いちご園，栗園，プラム園があるが，もっとも数の多いのはぶどう園である。秩父地域におけるぶどうの栽培は，市場出荷用に昭和20年代後半には始まっていたが，観光農園の開園は比較的新しく，昭和42年の皆野町の農家30戸が最初である。また，横瀬町の芦ヶ久保地区では，西武鉄道の開通の前年に，西武鉄道の職員が農家を回り観光農園の有利性を指導した結果，芦ヶ久保果樹公園村が発足している。

しかし，果樹公園村は，西武鉄道にとっては，いわば，秩父観光の呼び水であり，昭和50年，契約ぎれとともに西武鉄道は撤退している。さらに報告において，西武鉄道の開通をきっかけに急増した観光客も，昭和55年をピークにその後減少傾向を示すに至ると，既存の地域諸資源による観光客の吸引は限界であり，新たな観光資源の創出が急務であるという認識が高まっていき，その結果，行政（県レベル）と資本力のある外部の業者を中心とした，リゾート型の観光資源の創出が推進されていく過程も紹介した。

最後に，資本力のある企業が観光産業に参入してきている中で，今後，家族経営の農家が農業を継続する方策の一つとして，観光産業に展開していくことは，確かに困難な状況である。しかし，いわば「みどりと自然」産業である農業にとって，観光産業は同時に接近可能な魅力のある領域であり，地に足のついた今後の展開が求められる，と報告をまとめた。